

EXPO2025『大阪・関西万博』を訪ねて 紺野 能史

万博への道、心躍るひとり旅

日本での万博開催は、2005年の「愛・地球博」以来、実に20年ぶり。この歴史的な節目を自分の目で確かめたい、そう思い立ち、閉幕が近づく大阪・関西万博へ行ってきました。

太陽の塔から未来へ 新旧万博をめぐる

今回の旅では、新旧万博を味わうために、大阪のシンボルとして親しまれる「太陽の塔」へまず足を運びました。1970年大阪万博の象徴であるその姿は、半世紀を経た今もなお力強く、未来を見据える眼差しを放っています。残念ながら内部展示は予約がいっぱい、今回は入ることができませんでしたが、外から眺めるだけでもその存在感に圧倒されました。

そしていよいよ、現代の大坂・関西万博会場へ



20万人の熱狂とともに歩んだパビリオン巡り

来場日は10月9日と10日。閉幕が迫る時期とあって、会場には実際に20万人もの来場者が集まり、その熱気と人の多さに圧倒されました。

パビリオンの当日予約はまったく取れず、待ち時間は3時間以上。大屋根リングの下にあるベンチに腰を下ろし、水分補給をしながら空きが出ないかと繰り返し挑戦しましたが、結局どこも予約は埋まつたまま。それでも、事前抽選で当選していた「電力館」「日本館」「ガンダムパビリオン」を訪れることができました。

(電力館)

電力館では、未来のエネルギーを感じさせる展示が数多くありました。タマゴ型のデバイスを持って、太陽光や空気、音、生物など、自然の力を活かした発電を自ら体験できました。来場者は、小さな子どもを連れた家族が多くて、子供たちと一緒に走ったり声を出したりしてはしゃぐうちに、お父さん頑張れ！と「お父さん」に間違えられる場面もあり、少し恥ずかしく



も楽しい思い出になりました。

館内を包む光の演出も圧巻で、天井から降り注ぐ光が音や動きに合わせて変化し、まるで自分自身がエネルギーの流れの中にいるような感覚を味わいました。その幻想的な瞬間に思わず立ち止まり、周囲からも歓声が上がっていました。

体験時間はあっという間に過ぎて、自然の力が生み出すエネルギーの可能性を遊び心とともに実感できたひとときでした。

(日本館)



ホスト国のパビリオンとしては是非、行ってみたいと思っていた「日本館」。

最大の特徴は、円を描くように立ち並ぶ無数の「木の板」。万博終了後に日本各地で建物としてリユースされることを前提に、解体や転用がしやすいよう工夫されているとのこと。

館内は「プラントエリア」「ファームエリア」「ファクトリーエリア」の3つに分かれており、建物全体で循環の仕組みを表現しています。

特に印象的だったのは、世界最大級の「火星の石」の展示です。

日本の観測隊が2000年に南極で採取した後、万博で初の一般公開となった貴重な石で、その石を実際に触ることができました。

さらに、この貴重な体験を記念して配布された「火